

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	後凋軒茶話 : 雜録
Author(s)	中嶋, 後凋軒; 溪川生
Citation	龍南會雜誌, 60 : 17 - 21
Issue date	1897-11-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4925">http://hdl.handle.net/2298/4925</a>
Right	

# 雜 錄

## 後 凋 軒 茶 話

劍道囑託 中 嶋 後 凋 軒

日、春の如く、南窓鳥語閑かなり。友人三四と共に、舍監室に、中嶋先生を訪ひて、先生が劍道修學の談を乞ふ。先生疎髯を撫て、欣然として其經歷談を語らる。茶話録は卽是なり。文中予とあるは先生の事なれど、文字の責は一におのれにあり。一たび聽ひて壯快とどめがたく、不文を顧みず、掲げて以て我同人の間に頒つ、乞ふ諒せよ。

十月十四日、學寮秋燈の下にて、

溪川生とるす、

予豈に劍道を語り得べけんや、只一劍客なり、尙明眼の人を尋ねて斯道に忠ならんことを欲するものみ、客路三千、未だ其半百にたに達せざるを、予豈に劍道を語り得べきものならんや。止むなくんば予が三十年來の修道談を以てせんか。吾子、坐れ。

予が生家は備前岡山なり。八才の頃、瘧病を患ひて殆んど死に瀕す。夏の頃なりければ、蚊帳の外に、醫師の語るを聞けば、此兒、性來虛弱、とても生長覺束なし、藥石は徒に投するのみといふに、幼な心にも口惜しきことに思ひ、如何にもしてか、人並みくの身體にならばやと誓ひけるが、幸にえて此病も癒えたれば、専ら心を武道によせ、起仆流の柔術と、鏡心明智流の劍道とを學びたり、されば、十才の頃には、著しく強壯になりて、兄には四才の弟なれど、逞しさは殆んど兄を凌ぐに至れり。十三才の時、母を失ひたるが、是よりは兄と共に云ひかはして、只管斯道に嗜み、軍神八幡宮と、摩利支天と

に祈願をこめて、夜は五百目ばかりの木刀を以て、三四百振りとなし、土俵を造りて差し上ぐるなど、日夜心を碎きけるが、十四才の時、廢刀令出で、帶刀停止となりければ、劔をやめて一意に柔道に寄せたり、されば數年の精力、いよく顯はれて、十六の歳には、丈々五尺五寸に及び、十七八の時は、實に十八貫の土俵を扛げ、一貫目の棍棒を振れり。この時、臺灣に事あり、西郷從道、兵を率ゐて、征途に上らんとす、壯心何條か堪えん、乃書を上りて從軍を願ふ、許されず。されど初一念益固く、いよく精を斯道に入る、儕輩は皆指して我愚を笑はざるはなま。旦那寺に蓮城寺といふがあるに、こゝに鉄製の用水漕あり、五六人にして僅に動かすべし、予私かに是をもどかしき事に思ひ、この寺の本尊、摩利支天に百日日參の、祈願をなま、毎日來て試むれど、始めのはどは、ヒリともせざりけるが、七八十日になりて、其水僅に漣を催ふすに至りければ、其靈驗のいやちなるに、益々精を盡して押したりけるが、九十日目には、槽底コツコツと上がり、百日滿願の日になりたれば、水ザウウと溢るに至れり。この時の喜は、げに譬ふるものなかりけり。二十才の頃には、体量二十貫を越えたり、此時西郷隆盛、冠を掛けて薩に飯り、私學校を興す、予平生欽慕まて措かず、將に行いて遊ばんとしたりしが、兵亂起りて果さず。翌十年は恰も徵兵適齡なりしかば、遂に勧められて教導團に入れり。（此頃の人は、兵に入れば、工商と伍するが故に、士分の耻辱と思へりしなり）

さりとて、是も武邊の事にしあれば、必しも年來の所志に背きはせじと、一縷の望はなきにしもあらざりしを、毎日の課業は、只戎服をつけ、洋劔を佩きて、銃砲を荷ふのみ、不平禁すべからず、酒を被ひりて、僅に此鬱情を慰めたりき。この頃の兵士は我ばかりにもあらず、此の如き兵亂の時、まかも入隊を賤しとしたる人情の世に、自ら入團したるものなれば、悉く一とふしある者ばかりにまて、兵氣凜

凜とゑて實に抑へがたく、幾度か連署して出陣を請願したれども、訓練の日淺く、未だ軍規にも馴れざる儕なれば、固より聽かるべくもあらず、されば戰亂の一日も長からんことを希ひ、賊勝を聞けば、勇躍して喜ぶの有様なりき。

こゝに奇傑の士あり、姓は堀、名は龍太、號を松州といふ、駿州三保の人なり、元海軍に出で、中尉たりしが、職を退いて京に在り、社を結びて子弟を教ふ、孫子は其最心を潛めたるもの、孜々二十六年、一に精を此一巻に注げりといふ。予は上京以來此人に師事して其門に出入したり。常に誨えて曰く人は常に勝つといふ心なくんば、死灰に等し、生氣只これに依る、と、されば、予は強暴自ら許して棟梁跋扈、市に出で、は、必ず巡查と格闘せざれば止まず、かの虎の門前の格闘の如きは、陸軍始まりてよりの大騒動にして、四五名の巡查は致死するに及べり。されど同じ巡查の衝突には物足らぬことに思ひ、是より客馬車に體當りの衝突を始めたり、是馬丁が周章て、馬を引き留るがおかしければなり。さるに一日、例の如く馬車の駆け來るを待ちつけて、衝突したるに、運の惡るさには、郵便馬車なりけり、衝き突りたれど郵丁は見向きもせず、鞭音高く馬を叱りたれば、軍服は悉く車輪の爲に擦り切られて、怪我さへなしたるに、始めて危険のはぢを知りて、是よりはこの衝突も止めたりけり。さりとて此儘にやむべくもあらず、腕はいよゝゝ鳴る、乃ち消燈後私かに室を出で、スナイデル銃を倒に握りて、千回振をなし、又後庭の松樹に例の體當りをなしたりけるが、後にはこの松樹枯れたれば、營門の石柱に更へたり。かくの如く尋常の繩尺に依らず、不羈亂暴を極めたれば、禁足の罰などは、其幾度なりしかを知らず。而して松州先生は是を見て笑うて尤めず、

今、予はこの松州先生について少しく語らん。一日、例の如く諸生を集めて、勇といふ題を掲げて各意

見を述べしめ、後に自ら解して曰く、勇は遊なり、是實に吾經驗の上より信する處のもの。我家も豊富、近郷殆んど比ぶものなかりしが、年十七の頃より、一人の娼婦に迷ひ、酒色放逸、財寶是か爲に蕩盡せんとす、是に於てか一族相計りて吾をば一室に錮し、其婦女をば、三里ばかり隔てたるある山寺の別院に遠ざけたり。されど意馬狂ひ出で、は、なか／＼に止むべくもあらず、朝々暮々情懷禁ずべからず。ある大雨の夜、私かに一刀を携へて家を脱け出でたり。寺は小高き山の麓にあるが、山上より見下ろすに、書院は晝の如く明く、三昧の音さへ聞ゆ、つく／＼と見れば喃喃痴話を弄するのどろなりけり。何ぞ堪えん、嗔恚の焰は、忽ち念頭に炎え上がりて、其まゝ其崖頭より飛び下り、驀に突き入り、刀を振うて其婦を斬りたり、而て僧は遂に逸す。今にして思へば、栗然として危む。是に於てか勇は遊なりと解す、といひて滿坐をして抱腹絶倒せしめたることありき。

何つの頃なりけん、新富座開場の式を擧ぐるとき、各國の公使なども來りて、來衆殊の外夥多しかりしが、時未だ早くして、人々席に扣へて待ち居たるに、先生忽然として舞臺に上りて、大に海軍擴張演説をなす、滿場壓氣に取られて啞然たり。元來身体強壯、面色赤くして豎丹の如く、まかも音聲朗かなりければ、外國人などは、其異風に驚きて日本の人にあらずと、言ひ囃したりき。

福澤先生とは、親交の間柄にして毎に往來せり。一日福澤先生觀音の銅像を出して、君はこの左手の指を圓め、右手の掌を表はしたるの意を知れりや、といひけるに、打ち笑ひて、それは錢を持ち來よ、撫でゝやる、といふ心なり、と答えければ、福澤先生苦笑して止むたり。

先生今は赤貧洗ふが如く、妻子饑に泣き鉄腸寸斷せんとす、乃一日公會場を借り、新聞紙などにも廣告して、孫子の講演を開く、入場券價拾錢なり、先生、謂へらく、數日の饑を凌ぐべしと、而て會を

開き場に上りたれど、一人の聴衆なく、時を経て僅に四人を得たるのみ。されど、先生諱々として講じ終に巻を終へて止みたり。

又この時より、天徳寺の一室を借りて、講習會を開く、岡鹿門石川鴻齋なども來れり。先生の意は私かに義勇兵を組織せんとするなり、されど志遂に成らず。

予が同門の人にも亦頗る異采の人ありたり、川上行義(静岡の人)小原八十吉などの如きは其尤もなるもの、川上は、後、熊本鎮臺に赴任したるが、一年にして脱營して郷に販り、父の仇敵某を及殺じて、十年の懲役に服したりけるが、満期ならんとして牢死せり。而して予は、十二年十月に教導團を卒へて、大坂鎮臺に佐長となり、姫路に赴任したり。後、曹長に進み、満期の時は、士官適任の證を得たり。一度郷に販ち、又上京して山岡鉄舟先生が道場に入りて、今の正傳無刀流を學びたり。いざ是より關東武者修行の項に移らん、蓋し予が一生の歴史につきて、最重要にまで而して最多趣あるものなるべし。

(未完)

## 人類學の辯

海南先生

何人も其名を聞て多少其物を推測するを常とす。思ふに諸君のうち未だ人類學に關する書物を繙かざる人もあらん。されども人類學は何かと云ふ疑問に對して、如何で答へざる人は稀なる可し。例へば人類學は史學の一部分なり、人類學は英語の Anthropology に外ならず、人類學は古物を研究するものなりなど云ふが如し。此種の推測は幾分の眞實を含む可きも、往々誤謬に陷れるは甚だ遺憾なり。